

児童が持つ農村地域の自然環境への興味関心と農村振興へ向けた考察

～ 小学校の周辺環境が異なる道央地域の児童の比較～

Interest in rural nature of children and consideration for rural promotion
 ~ Comparison from difference of environment around school in central Hokkaido ~

須田達也*、丸山博子**、竹内晴信*

SUDA Tatsuya, MARUYAMA Hiroko, TAKEUCHI Harunobu

1. はじめに

都市と農村の交流や農村振興を促進する上で、それぞれの地域住民や多様な世代が持つ農村地域への期待感を把握することが、特に農村側にとって重要と思われる。そこで本報では、道央地域の児童（小学生）が期待する農村地域の自然環境での活動、興味対象物を調査し、さらに周辺の環境が異なる学校において比較検討した。

2. 調査方法

札幌市内の市街地に位置する小学校4校（うち2校は自然環境の教育フィールドを身近な場に有する学校<都市A>、有しない一般的な学校<都市B>）及び空知支庁管内の農村平野部に位置する小学校3校<農村>の3～6学年の児童を対象に、自然環境として森、水田、湿地（開放水面型湿地、植生繁茂型湿地）、川で構成された農村地域を設定し、行きたい場、行いたい活動、興味のある対象物について、選択式のアンケート調査を実施した。

3. 調査結果

農村地域に「行ってみたい」と興味関心を示した児童は全体で約9割を占めた。この傾向は都市部か農村部か、または都市A Bによる差は無かった（表1）。このことから、学校の特徴にかかわらず多くの児童は、農村地域の自然環境への興味関心が高いと推測された。

「行ってみたい」と興味関心を示す自然環境は、児童全体で、川と森への興味が高いが、水田、開放水面型湿地、植生繁茂型湿地のすべてが挙げられた。この傾向に学校の特徴による差は無かったことから（表2）、学校の特徴にかかわらず、児童は農村地域の様々なタイプの自然環境に興味関心を示し、特に川と森への興味が高いと推測された。

児童が「してみたい事」（期待する活動）は、児童全体で「遊ぶ」が最も多く、「自然を調べる」が最も少なく、この傾向に学校

表1 児童の農村地域の自然環境への興味関心 単位：%

項目	都市A (n=245)	都市B (n=235)	農村 (n=232)	全体 (n=712)
行ってみたい	91	92	90	91
行ってみたいくない	9	8	10	9

表2 児童が「行ってみたい」と興味関心を示す農村地域の自然環境 単位：%

項目	都市A (n=218)	都市B (n=216)	農村 (n=207)	全体 (n=641)
森	31	34	40	35
水田	5	9	3	5
開放水面型湿地	13	10	10	11
植生繁茂型湿地	12	8	8	10
川	39	39	39	39
合計	100	100	100	100

表3 児童が農村地域の自然環境で期待する活動 単位：%

項目	都市A (n=218)	都市B (n=216)	農村 (n=207)	全体 (n=641)
遊ぶ	80	74	82	78
探検する	63	58	60	61
自然をみる	66	52	50	56
自然を調べる	39	33	26	33
草花や生き物をとる	54	48	51	51

注：複数回答可

*北海道立中央農業試験場 Hokkaido Central Agricultural Experiment Station

**丸山環境教育事務所 Maruyama Environmental Education Office

キーワード：児童、自然環境、農村振興

の特徴による差は無かった(表3)。このことから、学校の特徴にかかわらず多くの児童は、「遊び」を主とした多様な活動を期待していると推測された。

児童が「おもしろいと思う物」(興味のある対象)は児童全体で「動物」が最も多く、「その他」が最も少なく、この傾向に学校の特徴による差は無かった。(表4)。また、児童全体で「植物」への興味が53%あり、「動物」と「植物」を合わせた「生物」への興味は非常に高くなった。

表4 児童が農村地域の自然環境で

項目	興味を示す対象			
	都市A (n=218)	都市B (n=216)	農村 (n=207)	全体 (n=641)
植物	58	49	52	53
動物	72	67	71	70
水	56	51	55	54
石・土・泥	32	31	31	32
その他	2	11	5	6

注:複数回答可

4. 考察

本調査から、小学校周辺の環境の違いに関わらず、多くの児童は農村地域の様々なタイプの自然環境で生物を対象とした遊びを主とした多様な活動を期待していることが明らかになった。こうした学校周辺の自然環境の違いによる差がない要因については、多角的な視点からの解明が必要だが、ここでは利用する場として自然環境の現状から考察を試みた。都市部では、学校内や都市公園や近場に自然環境が存在した場合においても、危険性が存在するケースが多く、立ち入りや生物の採取等の禁止行為が存在するケースが多い。一方、農村部でも、都市部と同様なことが言える。このように現状の多くの自然環境においては、活動の制限が存在するため、児童の期待に十分に応じきれていないことが推測され、このことが、学校の立地環境の違いに関わらず多くの児童が同様な期待を有する理由として推測される。特に、多くの児童が期待する「遊び」に対しての制限はさらに多いことが推測される。また、児童が興味を示す対象であった「生物」については、特に、都市部の自然環境においては、管理者は生物生息の持続性が低下する懸念を持っているため、立ち入りの禁止や生物採取の禁止する例が多い。

国の調査では多くの都市住民は、子供達の教育面における農業・農村の意義として、生き物を観察・採取するなど生き物とふれ合う機会を得ることを期待している¹⁾、このことより、全国的にも農村地域の自然環境の生き物とのふれあいへの期待は潜在的に大きいことが推察される。こうした期待に応じる方法として、農村地域において、多様なタイプの自然環境を生き物と人のふれあいも考慮して整備することが重要と考えられる。生き物とのふれあい空間の整備は、利用の視点から安全性が必要となる。次に、生物も含めた視点から、生物生息の持続性と生き物とのふれあいを併存させることが重要と考えられる。この併存の方法として、生物保全空間とふれあい空間を配置分けし、ふれあい空間を生物保全空間と生態的なネットワーク化することが大切と考えられる。こうしたネットワーク化は、都市部より農村部において容易と思われるため、農村部では都市部より、活動の制限が少ないふれあい空間が成立しやすいと推測される。以上のことから、農村地域におけるこれらの空間の整備は、都市と農村の交流や農村振興を図る上でも重要性を持つと推察される。

(引用文献)

1) 農林水産省「都市と農村の共生・対流等に関する都市住民及び農業者意向調査」(平成13年11月実施)